

文化・芸術

《名画の扉》

大川美術館コレクションから



「篝火」

1982年ごろ、紙本彩色
53・2センチ×72・8センチ

工藤甲人（1915～2011年）

各地で桜がつばみを であり続けました。

開き始めました。篝（か）が（り）火の籠がゆらりと夜桜を映し出した幻想的な本作では、暗闇に白く浮かび上がる満開の桜が、火の周りだけぼんやりとあたたかな光で照らされます。

工藤甲人は、作家は心の底に闇を持ち、すべてのイメージは闇の中からのみ生まれると考えました。そのイメージを真に生動したものとするために「闇の中から光の中にいったん解放してやるべきだ」と語ります。光と闇は画家の制作の根底において重要なテーマ

であり続けました。工藤は、青森県弘前市に生まれ、上京し川端画学校で学びます。大戦時には画業を中断し出征、終戦後しばらく故郷で農業をしたのち、創作を再開します。新しい日本画の創造を目指す創造美術で1950年に入選、翌51年には創造美術と新制作派協会が合流した新制作展で新作家賞を受賞。現実と想像が入り交じる幻想的な世界を描き出しました。

本作は、4月26日からコレクション展で展示予定です。

（大谷）